

23-10『賃金、価格、利潤』は私たちに何を教えているのか

『賃金、価格、利潤』は、私たちに次の三のことを教えている。

①賃金が多くなれば剰余価値が減り、賃金が減らされれば剰余価値が増えるのであり、「賃金が上がると物価が上がるから有害だ」とか「賃金を上げても物価が上がって取り戻されるから無駄だ」とかいう考えは誤りであること。

②好況のときは資本は一層の資本の拡大を図り労働需給が逼迫するので賃金を上げる(エンゲルスは『オープンハイムあての手紙』(1891年3月24日)で「好景気の時」「不景気の時」賃金がどうなるか、慢性的な経済停滞の時賃金がどうなるか、について、不破さんがここで話されているよりも、より正確に言っているので、参照されたい。)が、「賃上げ闘争は、たんにそれに先だつ諸変化の跡を追うものにすぎず」(P97)、「たんなる経済行動のうえでは資本の方が強い」(P84)から「超強力な社会的障害物の強要」が必要なのであり、労働者階級は「もろもろの結果とたたかいはしているが、それらの結果の原因とたたかっているのではない」こと。

③だから、「公正な一日の労働にたいして公正な一日の賃金を！」という保守的なモットーのかわりに、彼らはその旗に「賃金制度の廃止！」という革命的な合言葉を書きしるすべき」(P88)であり、労働運動は「現存の制度の諸結果にたいするゲリラ戦だけに専念し、それと同時に現存の制度をかえようとはせず、その組織された力を労働者階級の終局的解放すなわち賃金制度の最終的廃止のためのてこととして使うことをしないならば、それは全面的に失敗する。」(P89)と。